

京都部落問題 研究資料センター通信

第61号

発行日 2020年10月25日 (年4回発行)

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

当資料センター主催「二〇二〇年度差別の歴史を考える連続講座」の第一回から第三回を京都府部落解放センターで、一〇月二日・九日・一六日に開催しました。

講演要旨は次の通りです。詳しくは年度末に発行予定の講演録をご参照ください。

第1回

幕末の洪水対策と被差別民
—近年、解読の進む「今村家文書」から

から

講師 小林ひろみさん
(奈良県文化資源活用課会計年度任用職員)

大仏柳原庄は鴨川をはさんで五条通以南、八条通以北を領域とし、鴨川西岸、七条以南に五つの被差別民の集落を含む村であった。庄屋だった今村家には戦国時代から近代に至る六七〇〇点余りの多様な文書が残されている。この文書には銭座跡村などの穢多村や非人小屋と本村との関係なども多く記録されている。

安政三年(一八五六)に行われた鴨川浚(鴨川普請)は、上流の開発による土砂の流入などで川床が上昇して頻繁に起こった洪水対策のための官民あげての工事であつた。

た。砂持ちと呼ばれる浚った土砂を運ぶ作業や堤防の補強作業には地域住民が動員され、銭座跡村などからも人足動員や堤の補修材の調達、費用負担があつたが、その割当は村高に応じたもので人足賃も格差はなかつた。また工事についての情報も事後ではあるが伝えられていた。

この背景には、寛政五年(一七九三)の本村と銭座跡村との紛争の経緯がある。本村から同じ人足仕事への従事を忌避され、それに反発した銭座跡村は本村の支配をうけることを拒否し領主の直接支配を求め十一年間にわたって紛争が続いた。この過程で人足は村高に依りて出すという基準が領主からだされ、文化元年(一八〇四)に人足等の負担と領主への訴願は本村を通すことで決着したのである。

またこの鴨川浚の際に、工事用の簡易な橋を至急架けるよう奉行所から指示があり、本村側より水嵩が高いため延期を願い出たが聞き入れられなかった。そこで七条水車小屋の非人たちを呼んだところ、その日のうちに「投渡橋」が掛けられたという記録がある。

七条水車小屋の非人たちが村人が尻込みするような危険な作業を請け負っていたということ、そして彼らの水際での作業への熟練を見てとることができ、そのことが当時の社会で認知されていたことがわかる。

「今村家文書」の記録からは、被差別民とその他の住民との関係の変遷、対立だけでなく歩み寄りの側面を見ることができ、また、被差別民の屈せず主張する姿、地域全体の利益をはかる公共的な工事に労力を提供し、技能によって貢献していった姿も見ることができるといえる。

第2回

朝鮮通信使と「あの」絵図

講師 伊東宗裕さん
(佛敎大学非常勤講師)

朝鮮通信使は江戸時代、將軍の代替りを祝うために朝鮮國王から派遣された外交使節団で、全部で一二回派遣されている。

淀藩士の渡辺善右衛門が描いた「通信使淀城下到着図」には、寛延元年(一七四八)に通信使を淀城下で応接した様子が描かれている。大坂から淀川をさかのぼって

淀の船着き場に到着した通信使や随行の対馬藩士など千名くらいの人や馬の一団が城下を進み、京に向けて出発するまでの様子を、異なる時間の情景を同じ画面に描く「異時同時法」で描いている。

大きな十一隻の御座船の到着、それを迎える船着場、迎賓館である客屋の様子などが細かに描かれ、京への出発の折に暴れだした馬を制止しようとする通信使や日本人の騒動なども描かれている。また、路上では自由に歩き回る通信使たちの姿と共に、通信使を見ようとした多くの一般の物見高い人々の好奇心いっぱい姿も見ることもできる。

この興味深い絵図が、思わぬ波乱を巻き起こすことになる。

この絵図に、使節の食材を準備した建物の前で鶏を抱えて走る通信使とそれを追う人の姿が描かれている場面がある。この場面がある本の図版に使われ、通信使が鶏を盗んで追いかけているところだという解説がつけられた。この図版と解説がインターネット上で紹介されて以後、様々なブログやウェブサイトで取り上げられるようになる。いずれもこの場面を

「鶏を盗む通信使」と断定し、朝鮮通信使或いは朝鮮人を罵倒する文脈の中で使っているのである。

絵図全体や絵図の作者である渡辺善右衛門が淀での通信使の様子を文章で記録した『朝鮮人來聘記』などからも盗みとは断定できない。本来、絵図の全体を見てその性格を考慮した上で判断をするべきものであるし他の資料などとも突き合わせる必要がある。この絵図は歴史資料として様々な事が描かれおり、一部だけを拡大して不当に利用すべきではなく、冷静に分析することが必要である。

第3回

健常者とは誰か

—「耳なし芳一」を読み解く

講師 広瀬浩二郎さん

(国立民族学博物館准教授)

本年秋に開催予定だった国立民族学博物館特別展示「ユニバーサル・ミュージアム—さわる!—触の大博覧会」は、パラリンピックを一過性のブームに終わらせず、オリパラをきっかけに障害者問題を深く考えることをよびかける企画だったが、コロナ禍によって一

年延期となった。

この間、「濃厚接触」という言葉があふれ、人や物に触らない・距離をとるということが過剰に行われている。視覚障害者は情報を得るために点字や物を触り、誘導者の肘や肩に触ることが当たり前で、日常は濃厚接触によって成り立っていることを改めて確認することになった。コロナ禍はこの「さわる特別展」にとって逆風ではあるが、「触る」意義を考えるきっかけともなる。「触るマナー」を考えながら、視覚障害者が楽しむだけでなく目の見える人も触る事の楽しさ、面白さを取り戻す契機としたい。

「耳なし芳一」はラフカディオ・ハーンが収集・再話した怪談で、平家の怨霊に憑りつかれた盲目の芳一という琵琶の名手を引き戻すために和尚さんが芳一の全身に経文を書き、書き忘れた耳が怨霊に切り取られてしまうという話である。怨霊の住む文字のない、目に見えない世界と和尚さんの住む文字を使う、目に見える世界、二つの世界の間にいる芳一が引き裂かれる物語と読むことができる。文字を使わない生活が中心だった中

世から使えるようになった近世へと時代が移る中で目に見えない世界を軽視、切り捨てるようになる。コロナ禍で目に見えないウイルスに対して過剰に反応する中、目に見えないものを自然に受け入れていた前近代の生活を捉え返す必要があるのではないか。

近代以降、学校教育が制度化され文字を使うことが当たり前になる。その中で視覚障害者が自分たちの文字として獲得したのが点字である。六つの点で様々な事や文字を表す点字は、視覚障害者が使う特別な文字から、今後、触文化への気づきをもたらすもの、触るということをも促すツールになりうる。

来年の「さわる特別展」では、障害者・健常者という二項対立、できる人・できない人と分ける発想を乗り越え、触覚に依拠して暮らす「しよくしやうしや触常者」、視覚に依拠して暮らす「けんじょうしや見常者」という分け方をすることで常識を覆していきたい。また、触覚を働かせる面白さに気づいた「目の見える」触常者を増やすことで視覚に頼っている生活を見つめ直す契機としたい。

本の紹介
ヒョンソニョン
玄善允著

『人生の同伴者 ある「在日」家族の精神史』

石川亮太
(立命館大学教員)

本書は在日朝鮮人二世の著者による、自身の家族の歴史を素材とした長篇エッセイである。一九五〇年代から大阪市の北部でプラスチック成型の「コウバ」を営んできた濟州島出身の一家の暮らしと、思いが、さまざまな人々との関係を通じて描かれる。

本書末尾の著者略歴によれば、著者は「韓国濟州島出身の両親の二番目の子どもとして、一九五〇年に大阪で生まれる。日本の公立の小中高を経て大阪大学、大阪市立大学大学院で仏語、仏文学を学んで以降、京阪神の諸大学でフランス語・文学を講じ、その傍ら、在日、濟州、中国朝鮮族関連の研究もどきも愉しんでいる」という。これまで『「在日」の言葉』（同時代社、二〇〇二年）、『「在日」との対話』（同時代社、二〇〇八年）など「在日」にまつわるエッセイ、

評論集のほか、濟州島を舞台とする文学作品の翻訳などを手掛けた。

本稿の筆者（石川）は、朝鮮近代史を主に研究しているが、在日朝鮮人史について詳しいわけではない。しかし経済史や経営史に関心を持って書き込んでいることに関心を持ち（その種の文献は専門的な論文まで含めてもそれほど多くないようである）、読み進めるにつれ、そこに現れる様々な人たちの姿に魅力を感じた。本書副題の「精神史」について、あとがきでは「お金と労働と自堕落にまみれて、生き抜いてきた人々の中にかすかに息づいていた、惨めそうでいながらもしたたかな「心意気」の探索の物語」（四一九ページ）と説明している。本書に現

れるすべての人が、いわゆる「立派な」人だったわけではないが、一人一人の生き方と思いが敬意を込めた筆致で描き出されており、それが本書の魅力につながっている。

さて本書は、先述のように著者の家族史を素材とした作品だが、単純に時系列を追っているわけではない。描かれる時間は前後に往復するし、スポットの当てられる人びとも次々に切り替わっていく。各章のタイトルを見たのち、大まかな内容を紹介していきたい。

- 第一部 成長過程の僕と両親
- 第一章 母と子の幸せ
- 第二章 僕の特権化と脱出願望
- 第二章 両親の来歴と渡日後の生活
- 第三章 両親の来歴
- 第四章 在日の「下請け」の懐具合と技術革新の大波
- 第五章 母そして家を中心としたわれわれの関係世界
- 第三章 中年の僕と老齢化した両親
- 第六章 父の人生の整理
- 第七章 コウバの人間模様
- 第八章 父の吊いと宿題
- 第九章 母と自転車
- エピローグ 今なお現役の母

第一部では著者の幼少期から少年期にかけての暮らしが描かれており、年代としては、一九五〇年代なかばから六〇年代までにあたる。一家が住んでいたのは大阪市北部の東淀川駅と阪急三国駅に挟まれたあたり、一九六四年に東海道新幹線が開業するまではまだ耕地の多かった古い集落で、朝鮮人の住民は少数派であった。同居する家族は父母、著者を含めて五人（出生後すぐ亡くなった弟を含めれば六人）のきょうだい。次男坊の著者は小学校三年生の頃からコウバの手伝いに駆り出されながら、いずれは自分がコウバを継ぐのだろうと考えていた、という。自宅からそれほど遠くない別の集落にあつたコウバは、長屋の一部をぶちぬいて機械をしつらえた造りで、電化製品メーカーの下請け、孫請けとしてプラスチック部品を製造していた。事業欲の旺盛な父親は、著者が中学校二年生の頃、北朝鮮に帰国する同業者から買い受ける形でもう一つのコウバを持ち、著者はその空き部屋に住み込んで友人との交友や受験勉強の日々を送ることになった。

コウバで働く十数名の従業員は、遠縁・近縁のさまざまな親族か、

伝手をたどってきた同郷の出身者であり、少なくとも著者の幼少期には、仕事のうえの付き合いにとどまらず、家族のコミュニティとも切り離せない人びとであった。その中には済州島から密航の形で出稼ぎにきた人もいれば、帰国運動のうねりの中で北朝鮮に渡っていった人もいた。このほか大阪には、母親の実母、つまり著者の母方の祖母をはじめとして、相互に行き来のある縁者も多かった。子どもの頃の著者の眼を通じて、当時の在日朝鮮人の生活が、何重にも折り重なった人間関係のネットワークによって支えられていたことがよく分かる。

第二部は時代をさかのぼり、在日一世の父母が大阪に生活の拠点を築くまでの様子が描かれる。両親はいずれも一九二二年に済州島で生まれた。母親は先に大阪に出た実母を頼り、村の娘たちと一緒に密航船で渡日した。父親の場合も叔母と姉がすでに大阪に来ていた。戦後も日本に残った二人は、行商と買い出しの途次で出会って結婚した。

その後父親は、やはり済州島出身の知人からコウバを譲り受けて起業した。先述のように父親の事

業欲は旺盛で、コウバを拡張したり、新式のインジェクション機をいち早く導入したりしたが、それは借金まみれの経営を背負うことでもあった。在日の零細な下請け企業に都市銀行の貸し付けは望まず、頼母子講や融通手形による金融はしばしばパンクした。そうした中で「朝鮮人は日本人の二倍働いて一人前」を信条とする父親は身を粉にして働き続け、その誠実さが評価されて本人の死後にコウバを救うということもあったが、元請けに手の内を明かさず利益をひねり出すしたたかさも手放さなかった。

父親は学問にあこがれを持ち、左翼シンパでもあったが、五〇年代末の帰国運動には乗らなかった。父親にとって自分で切り開いた大阪での生活こそが生きるべき世界だったのだろう、と著者は推し量る。一方で故郷である済州島への想いも強く、六〇年代から頻繁に帰郷を繰り返すようになった。済州島に住む父親のきょうだいや親族が、第二次大戦や四・三事件の渦中でそれぞれ数奇な運命をたどったことも、詳しく紹介されている。母親については、東淀川の自宅を中心とする生活世界の中で築い

た人間関係が詳しく描かれている。母親にとって済州島出身の女性、とくに学校教育を経験しなかった一世女性との信仰を通じたつながりは掛け替えのないもので、その感覚は二世以後の女性にすら共有することは容易でない。一方で母親は自宅近隣の日本人とも付き合いを保ち、町内に宅地の買い増しを図るなど、「根付き」の努力を重ねた。幼少時から安定した家庭生活に恵まれなかった母親の不安が、土地への執着となっているのだろうと著者は考える。

第三部の時間は現代に飛び、老年期の両親と著者との関わりが中心に描かれる。父親は一九九九年に七七歳で死去するまで、年齢を重ねるごとに済州通いが頻繁となり、大阪にいる時さえ、家族やコウバのことは念頭にないよう著者には見えた。父親はそうした済州通いのなかで、財産と女性からみのトラブルに巻き込まれ、著者は母親とともにその処理に迫られることになった。父親はまた、大阪でも不動産経営のような副業や怪しげな投資話に興味を持ち、やはりトラブルに巻き込まれた。著者はこれを、下請けとしての事業能力の限界に気づいた父が、そ

れでも現役の人間であり続けたい欲望に駆られての行動と見ている。父親は、コウバを継ぐことになった末子（著者の末弟）にもなかなか経営権を譲ろうとせず、財産の細目はとうとう亡くなるまで明かさなかった。

一方の母親は九〇歳を超えて健在で、自転車杖として出かけることもあるが、多くの時間は自宅の二階の窓際に腰を掛けて、集落の様子を観察しながら過ごしている。若い頃から身についた心配性が、周囲の人びとへの疑心暗鬼として発揮されることもある。伝統的な祭祀を守り、家族で営むことへの執着は、子どもたちをつなぎとめ、仲睦まじい同居を願う気持ちのあらわれと思われるが、子どもたちの生活時間とのズレはいかんともしがたい。

また第三部では、コウバで働いていた様々な人びとについても触れられている。親戚の叔父さん、孤児院出身の少年、済州島から密航してきた出稼ぎ者。先述のように、これらの従業員は経営者である両親と、雇用関係を通じてだけ結びついていただけでなく、私生活にわたって関わりがあったし、両親はそのように関わろうとした。

しかし従業員の側がそうした関係のあり方を常に受け入れてくれたわけではないし、時には軋轢の種となることもあった。細部まで書き込まれたエピソードから、コウバで働く人たちがそれぞれに生きていた、生きようとしていた人生が鮮やかにイメージされる。

ここまで本書のあらすじを筆者なりに整理してみた。以下では、本稿の筆者が興味深く思ったことを順不同で紹介してみたい。

先に述べたことと重なるが、筆者が本書を通じて印象深く感じたことは、著者が登場人物たちそれぞれに敬意を払い、その立場に寄り添っていることである。しかしそれは、様々な事情を抱えた登場人物を不幸と決めつけ、不本意な生活を「強いられた」人びととして描くことではない。むしろそれらの人びとは、様々な条件のもとでその生活を選び取り、そう考えることによって自らの尊厳を保とうとする人々として描かれている。

そのような著者の姿勢は、あとがきの次の言葉に集約されている。「日本による植民地支配を筆頭としてじつに様々な社会的与件が複合的に作用していることは確かなのだが、少なくとも僕の両親はそ

うした与件の中で、自ら選び自らの意思で大阪に来て、父はそこで生を終えた。望みどおりの人生だったとは言えないかもしれないが、それなりに努力を尽くした末の天寿だと僕は思っている。母もまたそのつもりだろうし、そうなるだろう。そしておそらく僕もまたそのようになるだろう。そうなつてほしいし、そうするつもりである。」(四一六ページ)。

自己決定の重みを強調したこの一文は清々しい印象を与えるが、当事者ではない筆者(石川)としては、在日朝鮮人の苦難は自己責任だという安易な攻撃に利用される恐れもある気がして、自分の言葉として発するには若干のためらいもある。そして著者自身にとつても、このような境地に達するまでには相当の紆余曲折があったのではないかと思われる。このことは、例えば、本書の最も重要な登場人物である母親の描き方からうかがわれる。

著者の描く母親は、済州島での幼少期から家族に恵まれず、教育を受ける機会も得られなかったことなど、さまざま不幸を「わたしは馬鹿や」という口ぐせで引き受け、将来の不幸をも予見しながら

ら生きてしまう。一方で子どもの怪我や病気に際しては、不合理にも見える自己流のこだわりを貫いて、とうとう治してしまったりもする。この母親がある時、成長した著者にこう語ったという。「おまえなあ、誤解したらあかんので。念のために言うけど、うちは済州島を出るときから、帰るつもりはなかった。帰りたいなんか、一回も思ったことはないんですよ！」(二三三ページ)。

著者はこの母親の言葉を、「運命を切り開くためにやってきた大阪こそが自分が生きて死ぬ場所だ」ということを、言葉に出して再確認したかった」とものと解釈する。そしてこれを、学生時代の民族主義との出会いをきっかけに「ロマン主義的な在日像」を口にしがちであった著者への「冷や水」、「習い覚えた言葉や図式で現実や人間の気持ちを勝手に裁断してはならない」という警告」と受け取って、身のすくむ思いがしたという。

同じようなことは、父親の描き方からも読み取られる。著者の見るところ、「父親は望郷の念がすごぶる強い人」(二八二ページ)だったが、植民地支配からの解放後も故郷への帰還は選ばなかった。ま

た在日の左翼運動に共感して支援も惜しまなかったが、帰国運動に参加することはなく、全ての子どもを最寄りの日本の公立学校に通わせた。こうした父の選択について、著者は、「日本に渡ってきた目的を、まだ十分には実現していなかったからなのだろう」と推し量る(同)。その目的については、はっきりと示されていないが、端的にいえば事業に成功して一家を構えること、であったように読み取られる。自分の墓は済州島に作ることを切望していた父親だが、済州島はあくまで故郷かつ「癒しの場所」であり、「奮闘して生きる場所、それは如何に悔しい思いを数多くかみしめなくてはならないとしても、大阪以外にはないと思いついて定めていた」というのが、著者の見立てである。

植民地支配下の朝鮮人が経験した貧しさや苦しみについて構造的に理解する努力を放棄してはならないが、その下でよりよく生きようとした人々の選択の主体性を否定することもあってはならない。一人一人が選んだ生を尊重し、その目線にたつて理解しようとする姿勢が、右のエピソードに限らず、本書の人物造形全体に貫かれている

るように思う。

さて、こうした立場からは当然のことと言えるが、在日朝鮮人といつても生き方は一様でなかったし、その中での格差や分断、孤立も避けられなかったことが随所で描かれている。様々な背景を持つ人たちが働くコウバでは特にそうで、雇用関係と親族、同郷関係が絡み合うなかで起りがちだった葛藤がさまざまに紹介されている。

例えば、第三部に登場する「おじさん」は、母親の遠縁の妹分にあたる人の夫で、手がけてきた仕事を失い、中年になってからコウバに入ってきた。車の免許がなく力仕事もできないたちで、一日一四時間、機械の前に座って一分間隔で製品を取り出す作業を三〇年近く続けた。こうしたおじさんにとって、著者の父親は雇い主であるだけでなく親族関係における兄貴分ということにもなって頭があげられず、また著者の父親は、おじさんのゆつくりした仕事ぶりへの不満もあり「助けてやった」という目線で見ているところがあつたという。

ある日、こうした関係のわだかまりが爆発する。きっかけは、コウバの資金繰りが苦しくなった著

者の父親が、職人へのボーナスを半減したことであつた。不満を漏らしたおじさんに、父親は「恩義を忘れて」と口走った。我慢できなくなったおじさんは、コウバの

箒を持って父親と向き合う騒ぎになった。後日、母親に頼まれておじさんの家を訪ねた著者は、おじさんが大事に保管していたこれまでの給与明細の束を見せられて、こう言われたという。「もつと、もらつても良さそうな気もするけど、それはまあ仕方ない。それに、この程度の額でも、励みになる。それを経営者の勝手な都合で減らすというのは、こつちを認めていない証拠やないか。」(三三〇ページ)。

おじさんにとっては、その給与明細の束がよりどころであり、誇りでもあつたことが読み取られる。

普段のおじさんは大人しく、著者たち経営者一家のきょうだいを可愛がってくれ、「羨ましそうに、そしてまた誇らしそうな顔で」見つけていたという。しかし本当は、「僕らの姿をとおして自分のあり得たかもしれない人生を夢見ていたのかもしれない」(三三四ページ)。在日朝鮮人のネットワークに連なって生活を営みながら、それぞれに

異なる境遇にあつた人たちが、何に誇りを持ち、どんな夢を抱いていたのかが思いやられる。

摩擦は世代と世代の間でも起きる。その代表的な例は祭祀の場である。著者の母親は加齢にともない祖先への祭祀に異常にこだわるようになった。現実に取り残されつつある母親にとって、伝統的な系譜に連なっていることがよりどころなのであるが、母親は自分たちが「まっとうな」祭祀をできているか心配で仕方がない。父親の葬儀は、近所の日本の仏教寺院で営んだほか、儒教的な祭礼と、濟州島の巫俗儀式まで取り合わせて行つた。こうしたあり方は、著者からみれば「在日は偽物」という一世的自意識の現れに見えて、いたたまれない。しかし「僕のそうした感じ方のほうが、純粹を過剰に求める二世的コンプレックスの所産なのかもしれない」(三四六ページ)とも思い直す。「いかなる矛盾を孕んでいようと、生きるために必要なものなら何だつて取り入れ、それを自分なりに加工しながら恬然としている一世」のほうが、日韓の文化の二重性を体現しているのかもしれない、と。

以上、雑駁な形ではあつたが、

筆者が印象に残ったエピソードをいくつか紹介してきた。本書は、自分では語り残さなかつた生活者としての在日朝鮮人がどのような「精神史」を生きていたか、豊かな示唆を提供している。筆者の受け止めによれば、そうした「精神史」は、家族をはじめ、それぞれに自立しながら伴走している人間どうしの関係、すなわち「同伴者」との交流を通じて生まれるものというのが本書の結論であり、タイトルのゆえんである。本書そのものが、著者にとっては、自分と父母やきょうだい、さまざまな「同伴者」との関係を取り返し、自身の「精神史」を跡づけるための作業だつたのではないだろうか。

(同時代社刊、二〇一七年八月、二九〇〇十税)



マンライツ・クリエイターが提起するSNS相談援助の最前線 友永まや

ヒューマンライツ 390 (部落解放・人権研究所刊, 2020.9) : 500円

特集 「コロナ差別」～感染症との共存を考える

部落解放運動のこれから—引き継ぎそして変革へ 10 解放運動にかかわりつづける理由 靱山彩

ひょうご部落解放 175 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2019.12) : 700円

部落解放研究第40回兵庫県集會報告書

ひょうご部落解放 176 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2020.3) : 700円

特集 朝鮮学校—直面する困難と学校を支える人たち

戦後期兵庫部落解放運動史ノート 小西弥一郎を中心に
後編 高木伸夫

本の紹介

外川正明著『格差と不平等を乗り越える 教育事始』菅原淳也／ナディ著『ふるさとって呼んでもいいですか 6歳で「移民」になった私の物語』辻本久夫

部落解放 792 (解放出版社刊, 2020.7) : 1,000円
第46回部落解放文学賞

部落解放 793 (解放出版社刊, 2020.8) : 600円

特集 日本語・識字教育 同化主義を問う

本の紹介 内田龍史著『被差別マイノリティのアイデンティティと社会関係』出口真紀子

リバティおおさか裁判に関する和解についての共同声明
大阪人権博物館, リバティおおさか裁判弁護団

部落問題をキチンと取り上げる教科書、取り上げない教科書 人権の視点から、どう教科書を選ぶか? 上杉聰

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 44 まとめ 3 社会的分業と水平化—そのイメージ 川元祥一

部落解放 794 (解放出版社刊, 2020.9) : 600円

特集 コロナ・パンデミックと人権問題

西成で学びあう 中 黒川優子

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 45 まとめ 4 部落差別の現実を超える思想 川元祥一

部落解放 795 (解放出版社刊, 2020.10) : 600円

特集 ヘイトハラスメント裁判判決

本の紹介

熊本理抄著『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』徐阿貴／指宿昭一著『使い捨て外国人—人権なき移民

国家、日本』藤本伸樹／神原文子著『子づれシングルの社会学—貧困・被差別・生きづらさ—』高吉美

小特集 大阪人権博物館休館

再出発に向けた大阪人権博物館の課題と展望 朝治武／壁画「絆」の想いをつなごう! 太田恭治／「公益性」の復権を リバティおおさかとコロナ禍 西村秀樹

社会同和教育の開拓者・太田善照さん逝く 田村賢一、加藤昌彦

調査の基本認識を問う 部落差別解消推進法第六条に基づく調査を受けて 奥田均

部落史研究報告集 24 (八幡浜部落史研究会刊, 2020.

6)

小6社会科で被差別身分をどう教えるか 2—模擬授業に基づく追試を通じて— 菊池正

部落の人たちが、日本の歴史に影響を与えたすごいこと (パート2) 水本正人

「節季候」を演じた人たちは、どんな人たちか—和歌山城下の岡嶋「かわた」村の場合— 水本正人

続・盃状穴の民俗誌—継承されている実例と二次的用途について— 五藤孝人

部落問題研究 234 (部落問題研究所刊, 2020.9) : 1,058円

道頓堀周辺の非人行倒れ 塚田孝

戦後京都の部落調査の変遷—同対審答申期までの調査事例を中心に— 河野健男

国連・子どもの権利条約と広報・普及活動の意義—第四二条 (条約の広報義務) の意義と重要性— (上) 三上昭彦

書評 松岡弘之著『ハンセン病療養所と自治の歴史』木村哲也

部落問題文芸作品発掘 その15 誤解—続 彼の僧— (沖野岩三郎) 作品解題 秦重雄

本願寺史料研究所報 59 (本願寺史料研究所刊, 2020.8)

書評 『増補改訂 本願寺史』第三巻 福島栄寿

近世の本願寺、その日その日 写真鏡などあれこれ 左右田昌幸

水と村の歴史 32 (信州農村開発史研究所刊, 2019.3)

犀川の「船越長吏」 瀧澤英夫

史料紹介 「戊辰之記」—五郎兵衛新田村名主の慶応四年 (一八六八) 日記 (二) 浅科村古文書研究会

密教学 56 (種智院大学密教学会刊, 2020.3)

近世の本願寺、その日その日— (続編) 近世本願寺の別荘をめぐって— 左右田昌幸

むこうに見えるは ウェーブ21通信 18 (人権ネットワーク・ウェーブ21刊, 2020.7)

国勢調査小地域集計から見る改進黨地区 2

リベラシオン 179 (福岡県人権研究所刊, 2020.9) : 1,000円

被差別部落における祖先の〈物語化〉について—福岡市松原地区・井元政太郎による〈物語化〉に注目して— 関儀久

川向秀武氏の「教育への問い」とライフストーリー 3—教育研究者としての初期— 板山勝樹

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 39 「ひえもんとり」の周辺 6 石瀧豊美

和歌山研究所通信 69 (和歌山人権研究所刊, 2020.7)

夜間中学の歴史・現在・未来—全国と和歌山の動向— 江口怜

八重原村の被差別部落の歴史 9 柳沢恵二
 史料紹介・柳沢家から市川家へ五両届ける 斎藤洋一
身同 39 (真宗大谷派解放運動推進本部刊, 2020.5) : 1, 200円
 特集 聖教と私一差別問題から問われること
 部落解放運動から問われてきたこと—「是旃陀羅」問題
 を中心に— 解放運動推進本部／一人ひとりの課題とし
 て—「是旃陀羅」問題に関する教区学習会での声を通し
 て— 解放運動推進本部／聖教にみる性差別言辞の検証
 —『御文』を中心として— 女性室／解放の神学—生活
 の場と聖書の関係をめぐって— 浜崎眞実
 「女子」の得度 山内小夜子
 教育勅語と全国水平社創立宣言から問われる課題 吉田
 和豊
 2018年度人権週間ギャラリー展企画内容変更の経緯につ
 いて 解放運動推進本部
人文学報 114 (京都大学人文科学研究所刊, 2019.12)
 統治テクノロジーのグローバルな展開と「人種化」の連
 鎖—日本近代の部落問題の成立をめぐって— 関口寛
世界人権問題研究センター研究紀要 25 (世界人権
 問題研究センター刊, 2020.7) : 2,500円
 ネパール・ポカラ『さくら寮』卒業生教師の追跡調査
 山下泰子
 「安産中心史観」再考 伏見裕子
 「法期限後」につなぐ同和教育 若手世代の部落出身教
 師への聞き取りから 阿久澤麻理子
 日本の植民地支配に対する未来責任と特別永住者への処
 遇 李洙任
 巫女の諸形態—賤視される巫女・されない巫女— 山路
 興造
 梁民基とマダン劇—「自らの文化」創造の過程— 西川
 紗生
 <隣保事業的实践>と住民交流—京都市K同和地区の祭
 りの復活を事例として 中川理季
 Livelihood Security System in Japan:Focusing on Po
 licies and History on Buraku 矢野亮
全国隣保館連絡協議会情報誌 83 (全国隣保館連絡協
 議会刊, 2020.8)
 寄稿 兵庫県における隣保館調査について 山本崇記
月刊地域と人権 437 (全国地域人権運動総連合刊, 20
 20.9)
 「部落」の「今」はどうなのか 6 地域に住む人々から
 の聞き取り 丹波真理
地域と人権 1212 (全国地域人権運動総連合刊, 2020.9.
 15) : 147円
 全水100周年を迎え、考えること 5 人見亨と未発の「徹
 底的融和教育」 梅田修
地域と人権京都 816 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.7.1) : 150円
 戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 3 川部昇
地域と人権京都 817 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.7.15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 4 川部昇
地域と人権京都 818 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.8.1) : 150円
 戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 5 川部昇
地域と人権京都 819 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.8.15) : 150円
 戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 6 川部昇
地域と人権京都 820 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.9.1) : 150円
 戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 7 川部昇
地域と人権京都 821 (京都地域人権運動連合会刊, 20
 20.9.15) : 150円
 戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 8 川部昇
であい 699 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.6) : 1
 60円
 人権文化を拓く 271 難民移住者の子どもたちが「日本
 に生きて幸せだ」と思える社会に 松浦・デ・ビスカル
 ド篤子
であい 700 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.7) : 1
 60円
 人権文化を拓く 272 一人ひとりに向き合いながら、新
 しい社会の風景を作り出す 為末大
であい 701 (全国人権教育研究協議会刊, 2020.8) : 1
 60円
 食肉の授業の取組 広沢佑さん
 人権文化を拓く 273 非難から理解へ、叱責からケアへ
 ～こころのケアへのアプローチ～ 野坂祐子
はらっぱ 394 (子ども情報研究センター刊, 2020.9)
 特集 新型コロナウイルスと子どもの人権
ヒューマン・アルカディア 84 (福岡県人権啓発情報
 センター刊, 2020.7)
 特集 新型コロナウイルス感染症と社会
 人権からみた、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 阿
 久澤麻理子／新型コロナウイルスと子ども食堂—その活
 動から見えたもの— 釜池雄高／コロナ禍における韓国
 の市民生活について—ある地方都市への留学経験より—
 溝内亮佑／社会が感染症と向き合うためには 内田博文
ヒューマンJournal 233 (自由同和会中央本部刊, 202
 0.6) : 500円
 新しい部落史 3 村落共同体からの排除 灘本昌久
ヒューマンJournal 234 (自由同和会中央本部刊, 202
 0.9) : 500円
 新しい部落史 4 災害・疫病と中世賤民 灘本昌久
ヒューマンライツ 388 (部落解放・人権研究所刊, 20
 20.7) : 500円
 特集 認知症と人権—当事者と考える
 書評 内田龍史著『被差別部落マイノリティのアイデン
 ティティと社会関係』 野口道彦
ヒューマンライツ 389 (部落解放・人権研究所刊, 20
 20.8) : 500円
 特集 相談事業・いじめ対策のいま
 誰のいのちも置きざりにしない社会をめざして—ヒュー

- 解放新聞広島県版 2358 (解放新聞社広島支局刊, 2020.7.25)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 4
- 解放新聞広島県版 2359 (解放新聞社広島支局刊, 2020.8.5)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 5
- 解放新聞広島県版 2360 (解放新聞社広島支局刊, 2020.8.15)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 6
- 解放新聞広島県版 2361 (解放新聞社広島支局刊, 2020.8.25)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 7
- 解放新聞広島県版 2362 (解放新聞社広島支局刊, 2020.9.5)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 8
- 解放新聞広島県版 2363 (解放新聞社広島支局刊, 2020.9.15)
小森龍邦一『わが闘魂の半生』 9
- 架橋 43 (鳥取市人権情報センター刊, 2020.8)
特集 コロナ時代を迎えて
インターネットモニタリングをとおして感じたこと 田川朋博
みんなの架橋～架橋でめぐる全国の人権機関～ 徳島県立人権教育啓発推進センター (愛称: あいぽーと徳島) について
- 語る・かたる・トーク 304 (横浜国際人権センター刊, 2020.6) : 550円
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う
「届いていない当事者の声」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 305 (横浜国際人権センター刊, 2020.7) : 550円
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う
「弟は天使！」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 306 (横浜国際人権センター刊, 2020.8) : 550円
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う
「大人の仕事」 吉成タダシ
- 語る・かたる・トーク 307 (横浜国際人権センター刊, 2020.9) : 550円
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う
「人権作文という取り組み」 吉成タダシ
- かわとはきもの 192 (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2020.6)
靴の歴史散歩 137 稲川實
皮革関連統計資料
- 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 33 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2020.6)
<密>の文化、取り戻したい 渡辺毅
「東九条の語り部たち」 朴実さん幼少期編
- 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 34 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2020.7)
「東九条の語り部たち」 朴実さん少年期編
- 熊野 158 (紀南文化財研究会刊, 2020.5)
部落史素描 8 紀勢西線礪山トンネル工事の事故とその周辺 藤井寿一
- グローブ 102 (世界人権問題研究センター刊, 2020.7)
幕末の洪水対策と被差別民—近年解説の進む「今村家文書」から— 小林ひろみ
- 国際人権ひろば 152 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2020.7) : 350円
特集 国籍って何ですか?
- 国際人権ひろば 153 (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2020.9) : 350円
特集 新型コロナウイルス感染症と人権
- 試行社通信 405 (八木晃介刊, 2020.7)
2年後の水平社創立百年を部落解放運動はどう迎える
- 人権と部落問題 937 (部落問題研究所刊, 2020.7) : 600円
特集 ジェンダー平等の社会を
文芸の散歩道 どこかで見たような嘘の話—『関東潔競伝』より— 小原亨
ごった煮人生をふり返って 25 続々・早稲田大学部落問題研究会 成澤榮壽
- 人権と部落問題 938 (部落問題研究所刊, 2020.8) : 600円
特集 “戦後の平和”を見つめて
ごった煮人生をふり返って 26 早大部落研と東京部落問題研究会 成澤榮壽
- 人権と部落問題 939 (部落問題研究所刊, 2020.9) : 600円
特集 環境破壊に立ち向かう
文芸の散歩道 封印を解かれた小説—大江健三郎「政治少年死す」— 福地秀雄
人権と部落問題をめぐる主な動き (2019年4月～2020年3月) 尾川昌法
- 人権と部落問題 940 (部落問題研究所刊, 2020.10) : 600円
特集 介護保険20年の検証
文芸の散歩道 「飯倉断片」—島崎藤村の新発見の談話— 秦重雄
ごった煮人生をふり返って 27 東京部落問題研究会の活動 成澤榮壽
- じんけん ぶんか まちづくり 68 (とよなか人権文化まちづくり協会刊, 2020.7)
記憶から記録の時代へ 高田敏子さんのお話し
- 季刊人権問題 400 (兵庫人権問題研究所刊, 2020.7) : 770円
季刊「人権問題」の総目次 (第57号～第60号)
- 振興会通信 153 (同和教育振興会刊, 2020.7)
同朋運動史の窓 59 左右田昌幸
- 信州農村開発史研究所報 152 (信州農村開発史研究所刊, 2020.6)

収集逐次刊行物目次 (2020年7月～9月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 825 (長島愛生園刊, 2020. 6)

新型コロナウイルスとライ菌 山本典良

IMADR通信 203 (反差別国際運動刊, 2020. 7)

特集 コロナ・パンデミックと市民による危機対応

ウィングスきょうと 159 (京都市男女共同参画推進協会刊, 2020. 8)

図書情報室新刊案内

一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同著『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた—あなたがあなたらしくいられるための29問』/白河桃子著『ハラスメントの境界線 セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』

解放新聞 2958 (解放新聞社刊, 2020. 7. 5) : 115円
コロナ禍に想う 2 駒井忠之

解放新聞 2962 (解放新聞社刊, 2020. 8. 15) : 115円
本の紹介 内田龍史著『被差別部落のマイノリティのアイデンティティと社会関係』 澤井未緩

解放新聞 2964 (解放新聞社刊, 2020. 9. 5) : 115円
本の紹介 熊本理抄著『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』 藤岡美恵子

解放新聞 2965 (解放新聞社刊, 2020. 9. 15) : 115円
本の紹介 竹内渉著『戦後アイヌ民族活動史』 浅川肇

解放新聞大阪版 2209 (解放新聞社大阪支局刊, 2020. 6. 25)

水平時評 あらためて考えるリパティの存在意義 赤井隆史

解放新聞京都版 1186 (解放新聞社京都支局刊, 2020. 7. 1) : 70円

普遍的な価値を追い求めて 朝治武館長インタビュー

解放新聞京都版 1192 (解放新聞社京都支局刊, 2020. 10. 1) : 70円

でっ上げ痴漢冤罪事件 私は「やっていない」!それが真実 1 橋本幸樹

解放新聞東京版 983 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 7. 1) : 95円

荒川支部結成の頃をふり返って 高岩昌興

解放新聞東京版 984 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 7. 15) : 95円

大学における人権教育の取り組み 木下川のFWで確認できたこと 池田賢市

東京の「現地学習(フィールドワーク)」の現状と課題 1 「差別の現実学ぶ」ことの柱に部落の地域・仕事・生活を据える 藤本忠義

解放新聞東京版 985 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 8. 1) : 95円

法務省「部落差別の実態に係る調査報告書」から 東京の実態と課題 1 近藤登志一

東京の「現地学習(フィールドワーク)」の現状と課題 2 「差別の現実学ぶ」ことの柱に部落の地域・仕事・生活を据える 藤本忠義

解放新聞東京版 986 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 8. 15) : 95円

法務省「部落差別の実態に係る調査報告書」から 東京の実態と課題 2 近藤登志一

東京の「現地学習(フィールドワーク)」の現状と課題 3 「差別の現実学ぶ」ことの柱に部落の地域・仕事・生活を据える 藤本忠義

解放新聞東京版 987 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 9. 1) : 95円

法務省「部落差別の実態に係る調査報告書」から 東京の実態と課題 3 近藤登志一

東京の「現地学習(フィールドワーク)」の現状と課題 4 「差別の現実学ぶ」ことの柱に部落の地域・仕事・生活を据える 藤本忠義

解放新聞東京版 988 (解放新聞社東京支局刊, 2020. 9. 15) : 95円

水平社100年を迎えるにあたって 台東支部運動50年を振り返る 近藤登志一

解放新聞広島県版 2355 (解放新聞社広島支局刊, 2020. 6. 25)

小森龍邦一『わが闘魂の半生』 3

事務局よりお知らせ

◇「2020年度差別の歴史を考える連続講座」の前半3回が無事に終了しました。今年度も興味深いお話ばかりです。年度末の講演録をどうぞお楽しみに。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分